

# 源氏物語

藤袴

紫式部

青空文庫



むらさきのふぢばかまをば見よといふ

二人泣きたきこち覚えて (晶子)

ないしのかみ

尚侍

になつて御所へお勤めするようにと、源氏はもとより

実父の内大臣のほうからも勧めてくることとで 玉たまかざら鬢はんもんは煩悶を

していた。それがいいことなのであろうか、養父のはずである源

氏さえも絶対の信頼はできぬ男性の好色癖をややもすれば見せて

自分に臨むのであるから、お仕えする君との間に、こちらは受動

的にもせよ情人関係ができた時は、中ちゆうぐう宮みやも女御にょごも不快に思わ

れるに違いない、そして自分は両家のどちらにも薄弱な根底しか

ない娘である。中宮や女御における後援は期して得られるものでない上に、自分の幸運げな外見をうらやんで何か悪口をする機会がないかどうかがつている人を多く持つていてはその時の苦しさが想像されると、若いといつてももう少女でない玉鬘は思つて苦しんでいるのである。そうかといつて今のままで境遇を変えずにいることはいやなことではないが、源氏の恋から離れて、世間の臆測おくそくしたことが真実でなかつたと人に知らせる機会というもの得られないのは苦しい。実父も源氏の感情をはばかりて、親として乗り出して世話をしてくれるようなことはないと思なければならぬ。曖昧あいまいな立場にいて自身は苦勞をし、人からは嫉妬しつとをされなければならぬ。自分であるらしいと玉鬘なげは歎かれるのであ

つた。実父に引き合わせてからはもう源氏は道徳的にはばからねばならぬことから解放されたように、戯れかかることの多くなつたことも玉鬘を憂鬱ゆううつにした。自分の心持ちをにおわしてだけでも言うことのできる母というものを玉鬘は持つていかなかった。東の夫人にせよ、南の夫人にせよ、娘らしく、また母らしくはして交わつてくれるが、どうしてそんな貴婦人に内密の相談などが持ちかけられようと思うと、だれよりも哀れなのは自分の身の上であるような気がして、夕方の空の身にしむ色を、縁に近い座敷からながめて物思いをしているのであつたが、その様子はきわめて美しかった。淡鈍うすにび色の喪服を玉鬘は祖母の宮のために着ていた。そのため顔がいつそうはなやかに引き立って見えるのを、女房

たちは楽しんでながめている所へ、源宰相の中將が、これも鈍色にびの今少し濃い目な直衣のうしを着て、冠を卷まき纓えいにしているのが平生よりも艶えんに思われる姿で訪たずねて来た。最初のころから好意を表してくれる人であつたから、玉鬘たまがらみのほうでも親しく取り扱つた習慣から、今になつても兄弟ではないというような態度をとることはよろしくないと思つて、御簾みすに几帳きちようを添えただけの隔てで、話は取り次ぎなしでした。今日は源氏の用で来たのである。宮中からあつた仰せを源氏は子息によつて伝えさせたのである。おおようではあるが要領を得た返辞をする様子に、中將は貴女きじよと話し合う快感が覚えられた。野分のわきの朝にのぞいた顔の美しさの忘られないのを、その人は姉ではないかと恋しくなる心を責めていた中將で

あつたが、そうした障りさわの除かれた今は恋人としてこの人を中将は考えていた。尚侍の職をお勤めさせになるだけで帝みかどは御満足をあそばすまい、この世で第一の美貌びぼうをお持ちになる帝との間に恋愛関係は必ずできてくることであろうと思つと、中将は胸を何かでおさえつけられる気もするのであつたが自制していた。

「人に聞かせぬようにと父が申されましたことを申し上げようと思ひますが、よろしいのでしょうか」

と意味ありげに言っているのを聞いて、女房たちは少し離れた場所を捜して、几帳の後ろのほうなどへ皆行つてしまった。中将は源氏の言つたのでもない言葉を、真実らしくいろいろと伝えていた。帝が尚侍にお召しになる御真意は別にあるらしいから、き

れいに身を護ろうとすれば始終その心得がなくてはならないとい  
うような話である。返辞のできることもなくて、玉鬘たまかざらがた  
だ吐息といきをついているのが美しく感ぜられた時に、中將の心にはお  
さえ切れないものが湧わき上がってきた。

「私たちの喪服はこの月で脱ぬぐはずですが、曆で調べますと月末  
はいい日でありませんから延びることになりますね。十三日に加  
茂の河原へ除服じよふくの御祓みそぎにあなたがおいでになるように父は決め  
ていられるようです。私もごいっしよに参ろうと思つています」  
「ごいっしよでは目だつことになるでしょう。だれにもあまり知  
られないようにして行くほうがいいかと思ひます」

と玉鬘は言つていた。内大臣の娘として大宮の喪に服したこと



などは世間へ知らせぬようにせねばならぬと考えるとところにこの人の聡明そうめいと源氏への思いやりが現われていた。

「隠したくお思いになることが私には恨めしい気もいたしますよ。悲しい祖母のかたみのような喪服ですから、私は脱いでしまうのも惜しく思われるのです。それにしましてもやはりあなたと私とは一人の方を祖母に持っているのですから不思議な気がいたしますね。喪服をお着になることがありませんでしたら、真実のことを私は知らずじまいになったのかもしれない」

「私などにはましてよくわかりませんが、とにかく喪服を着ております気持ちは身にしむものですね」

こう言う玉鬘の平生よりもしんみりとした調子が中将にうれし

かつた。この時にと思つたのか、手に持つていた蘭ふじばかまのきれいな花を御簾みすの下から中へ入れて、

「この花も今の私たちにふさわしい花ですから」

と言つて、玉鬘が受け取るまで放さずにいたので、やむをえず手を出して取ろうとする袖そでを中将は引いた。

「おなじ野の露にやつるる 藤ふぢ 袴ばかま 哀あはれはかけよかごとばかり  
も

道のはてなる（東路あづまぢの道のはてなる常陸帯ひたちおびのかごとばかり  
も逢はんとぞ思ふ）

こんなことが言いかけられたのであった。玉鬘にとっては思いがけぬことに当惑を感じながらも、気づかないふうをして、少しずつ身を後ろへ引いて行つた。

「たづぬるに遥はるけき野辺のべの露ならばうす紫やかごとならまし

従姉いとこということは事実だからいいでしょう。そのほかのことは何も」

と言うと、中将は少し笑つて、

「その事実のほかには考えてくださらなければならぬこともおわかりになるはずですがね。常識ではもつたないことだと思つて

いるのですが、この感情はおさえられるものでないのですからお察しく下さい。こんなことを告白してはかえってお憎みを受けることになろうと思つて今までは黙つていたのですが、ただ哀れだと思つていただくだけのことで満足したい心にもなつているのです。頭中將の近ごろの様子をご存じですか、あのころは明らかにとうの第三者だと思つていた私が、こんなに恋の苦しみを味わうようになるなどということは冷淡にした時の報いです。今ではあの人が冷静になつてしかもつながる縁のあることに満足しているのですから、うらやましくてなりません。かわいそうだとだけでも私をお心にとめておいてください」

まだいろいろに言ったのであるが、中將のために筆者は遠慮し

ておく。玉鬘たまかざらに気味悪く思うふうの見えるのを知つて、

「私を信じてくださらないのですね。ばかな真似まねなどをする人間でないことはおわかりになっているはずですが」

こう中将は言った。この機会にもう少し告げたい感情もあるのであつたが、

「少し気分が悪くなつてきましたから」

と言つて、玉鬘が向こうへはいつてしまったのを見て、深く中将は歎息たんそくしながら去つた。

よけいな告白をしたと中将は後悔をしたのであつたが、この人以上に身に沁しんで恋しく思われた紫むらさきの女王にょおうと、せめてこれほどの接触が許されてほのかな声でも聞きうる機会をどんな時にとら

えることができずであろうと、その困難さを思つて心を苦しめながら中将は南の町へ来た。源氏はすぐ出て来たので、中将は聞いて来た返事をした。

「御所へ上がるのを、やっとしぶしぶ承諾した形なのだから困る。  
ひょうぶきよう

兵部卿の宮などが求婚者で、深刻な情熱の盛られたお手紙が送られていて、そのほうへ心が惹かれるのではなからうかと思うと気の毒な気にもなる。しかし大原野の行幸の時にかみお上を拝見して、お美しいと思つた様子だったのだからね。若い女は一目でもお顔を拝見すれば宮仕えのできる者は皆出ないではいられまいと思つて、最初に私の計らつたことなのだが」

などと源氏は言う。

「それにしましてもあの方とはどんなふうになられるのがいちばん適したことでしよう。御所には中宮ちゆうぐうが特殊な尊貴な存在でいらつしやいますし、また弘徽殿こうきでんの女御にょごという寵姫ちやうきもおありになるので、どんなにお気に入りにしましてもそのお二方並みにはなれないことでしょう。兵部卿の宮は熱烈に御結婚を望んでおいでになるので、表面は後宮の人ではありませんでも、尚なほ侍のなどにお出しになることによつて、これまでの親密な御交情がそこなわれはしないかと私は思いますが」

中將は老成な口調で意見を述べた。

「むずかしいことだね。私だけの意志でどう決めることもできない人のことではないか。それだのに右大將なども私を恨みの標的まると

にしているそうだと。一人の求婚者に同情して与えてしまえばほかの人は皆失恋することになるのだから、うかと縁談が決められないのだよ。あの人を生んだ母親が哀れな遺言をしておいたのでね、郊外であの人が心細く暮らしているということを知って、内大臣も子と認めようとするふうは見えないと悲観しているようだったから、最初私の子として引き取ることにしたのだよ。私が大事なるのでやつと大臣も価値を認めてきたのだ」

源氏は真実らしくこう言っていた。

「人物は宮の夫人であることに最も適していると思う。近代的で、<sup>えん</sup>艶な容姿を持っていて、しかも<sup>そうめい</sup>聡明で、過失などはしそうでない女性だから、いい宮の夫人だと思う。そしてまた尚侍の適任者



でもあるのだよ。美貌びぼうで、貴女きじよらしい貴女で、職責も十分に果たしうるような人物というお上の御註文どおりなのはあの人だと思う」

とも言った。中將は源氏自身の胸中の秘事も探りたくなかった。

「今日まで実父に隠してお手もとへお置きになったことで、いろいろなそんたく忖度を世間はしております。内大臣もそんな意味を含んだことを、右大將からあちらへの申し込みに答えて言ったそうです」

と中將が言うのと、源氏は笑いながら、

「それは思いやりのありすぎる迷惑な話だね。宮仕えだつて何だつて内大臣の意志を尊重して、私はできる世話だけをする気なの

だがね。女の三従の道は親に従うのがまず第一なのだからね。その美風を破るようなことはとんでもないことだ」

と言った。

「こちらには以前からりっぱな夫人がたがおいでになって、新しくその数へお入れになることができないため、世間体だけを官職におつけになることにして、やはりいつまでも愛人でお置きになることのできるようなお計らいは、賢明な処置だといって、大臣が喜ばれたということを、確かな人から私は聞きました」

中将が真正面からこう言うのを聞いて、源氏は内大臣としては、  
「そうも想像するであろうと気の毒に思った。」

「曲がった解釈をされているものだね。それが賢明な人の観察と

いうものかもしれない。もうすぐに事実が万事を明らかにするだろう。しかし、どうなるにしても余りにひどい想像だ」

と源氏は笑っていた。あざやかな弁解をしたつもりであろうが、まだ疑いは十分に残してよいことであると中将は思っていた。源氏も心の中で、こう人の噂うわさする筋書きどおりのあやまった道は踏むまいとみずから警いましめた。このきれいな気持ちをお大臣にも徹底的に知らせたいと源氏は思ったが、玉鬘たまかづらを官職につけておいて情人関係を永久に失うまいとすることなどを、どうして大臣に観測されたのであろうと薄気味悪くさえなつた。

玉鬘は除服じよふくしたが、翌月の九月は女の宮中へはいることに忌む月でもあつたから、十月になつてから出仕することに源氏が決

めたのを、お聞きになつて帝は待ち遠しく思召おぼしめした。求婚者は皆尚侍に決定したことを聞いて残念がった。それまでに縁組みを決めて、御所へはいるのを阻止したいと皆あせつて、仲介者になつてゐる女房たちを責めるのであるが、尚侍の出仕を阻止するよようなことは、吉野よしのの滝をふさぎ止めるよりもなお不可能なことであるとそれらの女たちは言つていた。源中将はしないでよい告白をしたことで感情を害しなかつたかと不安で、この苦しみを紛らわすために一所懸命に尚侍の出仕についての用などに奔走して好意を見せることにつとめていた。もうあれ以来軽率に感情を告げたりすることもなく慎んでゐるのである。兄弟である内大臣の子息たちはまだ遠慮が多くて出入りをようしないのである。御所で

尚侍の後援をするためにはもつと親しくなっておかないでは都合が悪いのにと、その人たちは不安に思っていた。頭とうの中將は恋の奴やつこになつて幾通となく手紙を送つてきたようなこともなくなつたのを正直だといつて女房たちはおかしがつていたのであるが、父の大臣の使いになつて訪たずねて来た。まだ公然に親であり娘であるという往来ゆききははばかつて、そつと手紙を送つて、そつと返事を玉たままかざら鬘まげが出すほどにしかしてないのであつたから、こうした月明の晩に隠れて頭の中將も訪ねて来たのである。以前はだれからも訪問者として取り扱おうとされなかつた中將が、今夜は南の縁側に座を設けて招ぜられた。玉鬘は自身で出て話をするこはまだ恥ずかしくてできずに、返辞だけは宰相の君を取り次ぎにして

した。

「私がいかに選ばれて来ましたのは、お取り次ぎなしにお話を申すようにという父の考えだったかと思いますが、こんなふうな遠々しいお扱いでは、それを申し上げられない気がいたします。私はずつまらぬ者ですが、あなたとは離しようもなくつながった縁のありますことで、自信に似たものができております」

と言つて、中将はもう一段親しくしたい様子を見せた。

「ごもつともでございます。長い間失礼しておりましたお詫<sup>わ</sup>びも直接申し上げたいのでございますが、身体<sup>からだ</sup>が何ということなしに悪うございました、起き上がりますのも大儀でできませんものから、こうさせていたただいてるのでございます。ただ今のよ

うなお恨みを承りますのは、かえって他人らしいことだと存じます」

まじめな挨拶あいさつを玉鬢たまむすはした。

「御気分が悪くてお寝やすみになつていらつしやる所の几帳きちょうの前へ通していただけませんか。しかし、よろしゅうございます、しいていゝんなお願いをするのも失礼ですから」

と言つて頭の中将は大臣の言葉を静かに伝えるのであつた。身の取りなしも様子も源中將に匹敵するもので、感じのいい人である。

「御所へおいでになることでは、くわしいお報しらせもまだいただいていませんが、あなたからその際にはこうしてほしい、何が入

り用であるとかいうことを言つてくだすつたら、そのとおりにしたいと思つています。世間の目にたつことが遠慮されて訪ねて行くこともできず、思うことを直接お話しできないのを遺憾に思つています」

というのが父の大臣から玉鬘へ伝えさせた言葉であつた。

「私が過去に申し上げたことについては、それほど訂正しないでもいいと思います。どちらにもせよ愛していただけがいいのです。そう思いますとまた恨めしい気にもなります。今夜の御待遇などからそう思うのです。北側のお部屋へやへお入れになつて、いい女房がたは失礼だと思ひになるでしょうが、下仕え級の方とでも話して行くようなことがしたいのです。兄弟をこんなふうにお扱い



になるようなことは、これも不思議なことといわなければなりませんよ」

批難するふうに言っているのもおかしくて、宰相の君に玉鬘は言わせた。

「人聞きが遠慮いたされまして、あまりにわかな変わり方は見せられないように思うものですから、お話し申し上げたい長い年月のことも、聞いていただけませんことで、私もお言葉のように残念でならないのでございます」

ときまじめな挨拶あいさつをされ、頭の中將はきまりが悪くなって、この上のことは言わないことにした。

「妹背山深き道をば尋ねずてをだえの橋にふみまどひけるいもせ

そうでしたよ」

と真底から感じているふうで中将は言った。

「まどひける道をば知らず妹背山たどたどしくぞたれもふみ見  
し

と申されます」

と女主人の歌を伝えてからまた宰相は言う、

「どのことをお言いになりますかそのころはおわかりになら

なかつたようでございます。ただあまり御おとなしくて御遠慮ばかりあそばすものですから、どなた様へもお返事をお出しになることがなかつたのでございます。これからは決してそうでもございませんでしょう」

もつともなことでもあつたから、

「ではまあよろしいことにしまして、ここで長居をしましてもつまりません。誠意を認めていただくことに骨を折りましょう。これからは毎日精勤することにして」

と言つて中将は帰つて行くのであつた。月が明るく中天に上つていて、艶えんな深夜に上品な風ふう采さいの若い殿上人の歩いて行くことははなやかな見ものであつた。源中将ほどには美しくないが、こ

れはこれでまたよく思われるのは、どうしてこうまでだれもすぐれた人ぞろいなのであろうと、若い女房たちは例のように、より誇張した言葉でほめたてていた。

大將はこの中将のいる右近衛うこんえのほうの長官であつたから、始終この人と呼んで玉たま鬢かざらとの縁組みについて熟談していた。内大

臣へも希望を取り次いでもらつていたのである。人物もりつぱであつたし、将来の大臣として活躍する素地のある人であつたから、娘のために悪い配偶者ではないと大臣は認めていたが、源氏が尚ないしのかみ

侍をばどうしようとするかには抗議の持ち出しようもなく、またそうすることには深い理由もあることであらうと思つていたから、すべて源氏に一任していると返辞をさせていた。この大將

は東宮の母君である女御にょごとは兄弟であつた。源氏と内大臣に続いての大きい勢力があつた。年は三十二である。夫人は紫の女王にょおうの姉君であつた。式部卿しきぶぎょうの宮の長女である。年が三つか四つ上であることはたいして並みはずれな夫婦ではないが、どうした理由でかその夫人をお婆ばあさま様と呼んで、大將は愛していなかつた。どうかして別れたい、別に結婚がしたいと願つていた。そうした夫人の關係があるために、源氏は大將と玉鬘との縁談には賛成ができないでいたのである。大將の家庭のためにもそう思ったことであり、玉鬘のためにも煩雜な關係を避けさせたかつたのである。大將は好色な人ではないが、夢中になつて玉鬘を得ようとしていた。内大臣も断然不賛成だといふのでもないといふ情報を大將は

得ていた。玉鬘自身は宮仕えに気が進んでいないということもまた身辺にいる者からくわしく伝えられて大将は聞いていた。

「ではただ源氏の大臣だけが家庭の人になるのに反対していられるのだというわけではないか。実父がいいと思われる事どおりになすつたらいいじゃないか」

と大将は仲介者の女房の弁を責めていた。

九月になった。初霜が庭をほの白くしたえん艶な朝に、また例のように女房たちが諸方から依頼された手紙を、恥じるようにしながらたまかざら玉鬘の居間へ持って来たのを、自分で読むことはせず、女房があけて読むのをだけ姫君は聞いていた。右大将のは、

恋する人の頼みにします八月もどうやら過ぎてしまひそうな空

をながめて私は煩悶はんもんしております。

数ならばいとひもせまし長月に命をかくるほどぞはかなき

十月に玉鬢たまきりが御所へ出ることを知っている書き方である。兵ひょう部ぶ卿きやうの宮は、

不幸な運命を持つ、無力な私は今さら何を申し上げることもないのですが、

朝日さす光を見ても玉篋たまげの葉分はわけの霜は消けたずもあらなん

私の恋する心を認めていてくださいましたら、せめてそれだけを慰めにしたいと思つています。

というのである。手紙の付けられてあつたのは縮かんだようになつた下折れ笹に霜の積もつたのであつて、来た使いの形もこの笹にふさわしい姿であつた。しきぶきよう式部卿の宮の左さひようえのかみ兵衛督は南の夫人の弟である。六条院へは始終来ている人であつたから、玉鬘の宮中入りのこともよく知つていて、相当に煩悶をしているのが文意に現われていた。

忘れなむと思ふも物の悲しきをいかさまにしていかさまにせん



選んだ紙の色、書きよう、焚たきしめた薰くんこう香におの匂においもそれぞれ特色があつて、美しい感じ、はつきりとした感じ、奥ゆかしい感じをそれらの手紙から受け取ることができた。玉鬢たまかみが御所へ出るようになればこうしたことがなくなることを言つて、女房たちは惜しがつていた。宮への御返事だけを、どういう気持ちになつていたのか、短くはあつたが玉鬢は書いた。

心もて日かげに向かふあふひ葵あひだに朝置く露をおのれやは消けつ

ほのかな字で書かれたこの歌に、同情を持つ心の言つてあるの

を御覧になつて、一つの歌ではあるが宮は非常にうれしくお思いになつた。こんなふうに恨めしがる手紙はまだほかからも多く来た。求婚者を多数に持つ女の中の模範的の女だと源氏と内大臣は玉鬘を言つていたそうである。

# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年1月15日44版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：伊藤時也

2003年9月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

藤袴

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>